



同志社校地を掘る

上京の歴史的変遷

大学図書館建設地点発掘区全景

出席者 (ABC順)

大学工学部教授	原 正	本部庶務部長	園 望	大学経済学部教授	笹田友三郎	専任研究員	仲 村 研	人文科学研究	森 浩 一	女子大学教授	林 淳 一	大学文学部教授	森 浩 一	大学法学部教授	小 野 哲	本部庶務部長	笹田友三郎	本部職員	園 望	校地学術調査委員会調査主任	鈴木重治	大学工学部助教授	横山卓雄	(司 会)		大学商学部教授	安岡重明
---------	-----	--------	-----	----------	-------	-------	-------	--------	-------	--------	-------	---------	-------	---------	-------	--------	-------	------	-----	---------------	------	----------	------	-------	--	---------	------

園部 同志社校地を中心とした、上京地区とでも申しますが、このあたりは、特に最近埋蔵文化財等の問題もございまして、すでに当学園におきまして二、三カ所「大学校地学術調査委員会」にお願いいたしまして、発掘調査を進めたりもいたしておる訳でございますが、きょうは、「同志社校地を掘る」といったことをテーマに

していただきまして、このあたりの歴史と現況、それからまた未来像等につきまして、いろいろお話をしていただければひじょうにありがたいと思う訳でございます。

安岡先生にこの会の司会をひとつ、いろいろ掘り出していただきますように……。

歴史の窓をあける

安岡 私は経済の歴史のほうをやっているんですけども、京都の歴史については、ほとんど無知でありますので、司会役には困ったんですが、司会というのは人にお話いただく役割りでありますので、かえって自分がしゃべらなくても済むだろうと、そういう魂胆から快くお引き受けした訳であります。

まず第一に、現在、校地学術調査委員会がいろいろ活動しておりますので、その会の設置の目的などをお話いただきまして、そのあと同志社の土地の歴史を振り返るという意味で、平安京以前から明治のころまで、時代を追ってお話をしていただき、それから現在直面している同志社の問題、あるいは今後の問題といったことをお話いただければ、というふうに思う訳でございます。

初めに、校地学術調査委員会の設置の目的、活動状況というものを話いただければと思いますが。

森 同志社の周辺は、平安京があった時代もあれば——同志社の周辺自体は平安京の中には入らないので、同志社よりも少し南の一条からになります——あるいは室町幕府の時代には同志社のごく近辺に室町幕府があった訳で、場合によたら同志社は一部幕府の所在地にかかっているのではないかと思います。とぐらいい接近しておる訳であります。ところが、地上にはその当時のものはもうほとんど何もない訳で、すべてが地下に何らかの痕跡をとどめている可能性がある。そういう地下に埋っております歴史の材料、それを広い意味で遺跡と呼んでいまして、それを文化財保護法という法律で保護し、破壊を規制しております。

ところで、学問のいう遺跡と、法律が対象とする遺跡とがうまく合いません。それは当然のことでありまして、どうしても学問のほうが先行する訳であります。そのような状況の中でも京都市はできるだけ学問の発達に歩調を合わせようという姿勢で、二、三年前に

はだいたいの南北朝のころまでのものを法律でいう遺跡の対象にするというようなことをきめたのです。

そういうふうには南北朝のころまでを京都では法律でいう遺跡の対象にいたしまして、もし、それ以前のものが埋っておる可能性があるところで土木工事等をやる場合は、京都市に届け出て、文化庁の指示を受けよといったような扱いをした訳であります。

同志社でも建物の改築とか増築とかいうときに、文化庁なり京都市が言ってくるから掘るというのでは、大学としては見識のないことで、たとえ地下に遺跡があろうがなかろうが、やはり大学にはいろんな学問をおやりの方がおる訳ですから、さまざまな立場でその土地にたいする興味がある。つまり、広い意味の同志社及びその周辺の土地の変遷の歴史に取り組もうというので、校地学術調査委員会が四十八年の夏にでき上がった訳であります。

この校地学術調査委員会では同志社の敷地、いろんなところが掘りたい訳でありますけれども、なかなかあいてるところがないので、木造の建物なんか撤去された機会など

を利用して、今回までに女子大で一カ所、今出川校地で一カ所、それから新町で一カ所、ほぼ校地の全体に歴史の穴といえますか、歴史を知るための窓をあけることに一応成功した訳であります。

しかし、こういう発掘が軌道にのると、問題もでてくるのです。かりに一回の発掘に三十日を必要としますと、あとの遺物の整理とか報告書を書くのに、その二十倍ぐらいは日数がかかるというのが、考古学の常識でありますから、ばく一人の片手間ではできない。しかも、個人はもう少し古い時代の考古学をやっておりますので、そういう新しい時代は苦手なので、理事長室のほうで一人文化財担当の専門職の方を採っていただいた訳であります。

成立の動機から今日までの経過はそういうことであります。

同志社の土地ができるまで

安岡 次に、いよいよ同志社の土地の歴史に入りますが、平安京の、というよりもっと古い時代の土地の歴史というものを横山先生からお話いただければと思います。

横山 京都、特に同志社のまわりということとで考えてみますと、人間が自然の状況をつくりかえる以前の京都というのがどんな状態であったかということについては、詳しく分かっていないといえるのではないかと思います。

京都盆地ができたのはだいたい百二十万年前というような大きい年代で、われわれが知っているのがせいぜい三十万年か十万年前ぐらいまで、つまり京都盆地ができた百二十万年前というような時代から、十万年、二十万年前ぐらいまではよく分かるんです。歴史というのは、年代が長くなりますと大ざっぱになる訳で、大ざっぱに分かる訳です。それから以後分かるといいますが、平安京直前までの自然の様相というのはなかなか分かりません。一番いけないのは、先程森先生がおっしゃったように人間の手が加わっているもので、自然そのものというものを復元するといことがひじょうにむずかしいことです。

例えば平安京の遺跡を掘っておられる方々に聞いてみますと、平安京の遺跡というのは、現在の地表面から二メートル下とか三メートル下とか、あるいは五十センチ下とかい

うふうに出てくる訳です。従って、われわれが平安京の古図なんかを見てますと、現在の京都市みたいにのっぺらぼうの平地の上に都が造成されたような気がしますけれども、実は平安京時代の原地表面というのは、もう少し複雑に、谷があったり、平地があったり、川があったりする訳です。そういうことから、現状においてははっきり分かってない。

ただ、もう少し大ざっぱな話をしますと、同志社校地を掘っていただきますと分かりますが、だいたい二メートルないし三メートルの深さからは歴史遺物が出てくる。それより深いところは、みんな砂利層、いわゆる玉石でできている訳です。京都大学を掘りますとほとんど白川砂といいますが、花崗岩質の砂でできている。ひじょうに違う訳です。だいたい同志社の下のれき層というのは十メートル以上ありますけれども、これがいつの時代にできていて、どんなふうになっているかというふうなことは、はっきり分かっておりません。とにかくこんど学術調査委員会の調査で私がたつた一つやってみたのは、同志社の地下に堆積している玉石は全部賀茂川系のれきだろうということをれきの種類から結論づけ

ている訳です。賀茂川の扇状地の上に同志社が建っているということです。それから京都大学は白川の扇状地の上に建っている。京都大学の場合ですと、例えば今出川通りに向かって吉田のほうからも平安時代の地層面がだ

んだん低くなりまして、それから北側からまだんだん低くなって、ちょうど現在の今出川通りというのは昔の川だったというようなことが分かる訳です。向こうは白川砂の中に黒い古土壌が残っておりまして、その中から縄文の土器だとかいろいろなものが出てくるので、ひじょうに分かりやすい。ところが、同志社の場合は、れき層だけがあって、人類遺跡が出てきたとたん、それから以後はどちらかというと森先生の分野になるという形になる。その扇状地がいつの時代にできたかというようなことははっきり分らないという状況です。

こんど地下鉄の烏丸線が通りますが、その事前調査にちょっとかかわり合うことがありまして、いろいろ調べていますけれども、いわゆる賀茂川の扇状地の上に同志社ができていたということ以外は、あんまり分かってないというのが、正直なところだと思います。

森 横山さん、そうすると同志社周辺でれきが堆積し終って、人間が——舟に乗るのは別にして——普通に住める地形になったのは、何年ぐらい前ですか。

横山 京都で一番よく分かっているのは横大路の沼なんですけれど、横大路沼は深さ十二メートルくらいのところにやつぱりれき層があるんです。これは木津川系なんですけれども、そのれき層の年代が約一万年前で、その上に約十メートルぐらいの沼地の粘土がある。従って、気候的にも地殻の動きからいっても、常にれき層がくぼ地のまん中に出てくるということはない訳で、だいたい同じころだと考えれば、同志社付近は、一万年以後あんまり地形が変わってないと言えると思いますね。

それから以後は白川砂みたいにどんどんとあとから砂がくる場合にはだんだん高くなるけれども、その他のところはあんまり変化がないんじゃないかと思えます。

賀茂川の流路

仲村 私なんか、京都のことをたまたま啓蒙書やなかで読む訳ですけども、いまの

賀茂川はもとは堀川で、上賀茂からまっすぐズトンと南へいって、それに高野川がずうっと京都の町を斜めにつきつて、下のほうで合流しておった。従って、いまの上賀茂から出町までの川は、平安京が造営される少し以前に渡来人なんかのすぐれた技術でもって、新しく流路を造ったんじゃないかというような話がありますけれども、その点はどうですか。

横山 少なくとも現在の賀茂川が堀川筋だというのは間違っていると思います。というのはいろいろのデータが最近出ておりまして、基盤の形とか、下の岩石の形がだんだん分かるようになってきていますね。それで見ると、現在の賀茂川が今の堀川筋を流れていたということはあり得ないと思いますね。ですから、賀茂川は京都盆地の北縁から同志社付近ぐらいまでは東部、つまり現在の賀茂川の流路を流れていたようです。賀茂川と堀川は明白に違うと思います。

それから、高野川が賀茂川にどこで合流していたかということですが、少なくとも同志社の校地には高野川の影響は全くない。これはこんどの同志社の工学会の報告にちょっと

書きましたけれども、全くないんです。高野

川が合流するのはもう少し下で、四条よりちよっと上ぐらいですが、そのぐらいなんです。その辺の地層を見れば分かるんですけれども、ビルの底のぞきなど穴のぞきをやる人間は実はあまりいい訳ですね。と申しますのは、ビルの基礎工事として穴を掘ってたら一々その工事現場へ行って、頭下げて見せてもらって、入ってというのもめんどくさいものですからね。しかし、高野川は賀茂川にどこかで合流する訳です。どうも感じとして微高地などの地形から考えると堀川が一番低いからという話は間違っていると思うんです。われわれが持っている断片的なデータから考えると間違っているものであって、統一的にだれも発表していません。間違っているなら、何か発表すればいいじゃないかということなんです、発表するまでデータはそろってない。ところが、いろいろ考えるところいうようなことが言えるというのが現状だと思えます。

ただ、河川改修やって、まっすぐ通したかどうかは、私にはまだ分かりません。渡来人なんかの技術でやっているということはあ

と思いますけれどね。

森 今の横山さんの発言はひじょうに重要で、これは学界の一種の定説にたいする修正であって。

ただ、都をつくるときに川を大幅につけかえるということは、藤原京の場合も、飛鳥川を斜めから直角に、西に流してまた北へつけかえているし、平城京をつくるときも佐保川をかなりゆがめていますね。だから現在の賀茂川と高野川が出町の北東で合流してずっと平安京の東に沿って南へ流れておる流路は、やはり平安京をつくる直前に、大規模に手が入っているとはくは思うのです。

そうすると、もとの賀茂川は一体同志社のどのあたりを流れておったのか、同志社の東か西なのか。それはどうでしょうか。

横山 やつぱり東だと思いますね。というのは、例えば、佐保川にしても飛鳥川にしても、いわゆる洪水の規模からみたら賀茂川と全然違いますね。賀茂川を改修するとしたら相当たいへんな難工事になると思います。だから、現在の賀茂川の流路、蛇行しながら曲がって流れてたのをまっすぐするとかいうようなことはあるかもしれせん。ぼくはやっ

ぱり同志社より東を流れていたと思いますね。

今出川という川

小野 今出川というのは人工の川ですか。

横山 今出川という名前が出てくるのは、あれは歴史時代ですね。

仲村 あとでふれることになると思いますが、『徒然草』に今出川の記事があるんです。それで見ますと、だいたい一条の東洞院ですから、今出川の御門をまっすぐに南下していつて、一条通りで東へ折れているらしいですね。で、おそらく今の御所付近に屋敷が詰まってきたので、北小路——その当時は今出川通りといわず、今出川は縦の線ですから——で曲げたということで、『徒然草』に出てくる記事が応長年間ですから、十四世紀の初めで、それ以後にいまの今出川通り、当時の北小路で曲げたんじゃないか、ということが確実に言えますね。

小野 そうすると、何か自然の流れがあつて、それをどうかしたのが今出川ということですか。

仲村 そうですね。雲ヶ畑あたりで賀茂川

から分かれて流れてきてますね。ずうっと小山郷を通して、いまの鞍馬口病院のところから上御霊神社のほうに入って、南下してきておりますね。それがいまの御所、土御門内裏や、それから貴族の邸宅や何かで押されてきて、今出川で曲げざるを得なかったということじゃないかとぼくは考えておるんですけれど。

人間集団の定住の跡

林 『烏丸』という語源は何から出てきたんでしょうか。

仲村 『拾介抄』の平安京の地図では、『子代小路』と書かれておりますが、言い伝えによりますと、烏が飛んで来て、あそこで円を描いた。これは井上頼寿さんの『京都民俗志』ですか、京都の井戸とか、石とか、食物とかを大正の終りから丹念に調べておられる方ですが、この方の書物のなかにそういう話が収録されてあります。ですから、平安京ができしはらくたったときの通称は子代小路ですね。それがやがて、ほんとうかどうかは知りませんが、ある僧侶が寺院を建立しようとしたところ、烏が近江から瓦をくわえて

運んできて烏丸あたりで旋回したとか、そういう言い伝えが記されていますけれど……。

鈴木 森先生に伺いますが、現在私たち今出川通りというと東西の通りを指している訳ですが、川自体は歴史的に南北に位置している。昨年地下鉄の烏丸線の工事に伴う事前調査の際に、烏丸中学校の前あたりで弥生の土器が出ていますね。今出川の右岸の自然堤防状地形が一部あの地域にあつて、その上に弥生の時期の集落があつたかどうか、そこらあたりどうなんですか。

森 京都市内といっても、特に旧平安京及びその周辺の低地ですが、最近どんどん弥生式の土器が見つかってきていますね。つまり日本で最初のイネをつくつたと推定される文化の……。ところが、弥生式土器が出れば必ずそこに大きな農村的な集落があつたかという、それはまだ分からない訳ですね。しかし、烏丸線に沿って最近見つかつておるところでは、イネの収獲用の石廂丁なんかも見つかつておるところがありますし、また、烏丸通りより少し西の中立売でも、弥生式土器が、かなり発掘されている。だから、大きな面積の集落、あるいは集落に伴う広大な水田

の存在は無理でも、小集落は西暦紀元前後から一世紀ごろにはこの烏丸通りぞい、さらには同志社の周辺にもぼつぼつ出ておつたと考えてもよい。ただ、三回の発掘では、同志社関係のところからはまだ弥生式土器は破片も出てないですね。

鈴木 そうですね。三回の発掘を通して、一番古いところでは、古墳時代の須恵器ということになります。

出雲氏の居住

安岡 平安京に入つたところの話を、森先生からお話聞きたいんですが。

森 京都の歴史という、どうしても平安京になってからが注目されるのですけれど、実は平安京以前がおもしろいところなのです。例えば、同志社の周辺を例にとりますと、同志社から少し北へいった上御霊神社の境内がちょうど出雲氏の寺の跡ですね。出雲寺跡と全くダブっているのです。ですから、あそこから奈良時代の瓦が沢山出てきます。出雲氏関係の地名、出雲路橋とか出雲路幸神社とか、かなり残っておりますね。そうして出雲氏はここに住んでいただけではなくて、

全国でもひじょうに珍しいことが分かるのです。それは、税をとるとき台帳——計帳というんですが、出雲郷の計帳が正倉院に残っておるのです。これは古代史の基礎史料としてよく使われるのです。ですから、学生諸君も、出雲郷の計帳というのはよく知っておるけれど、それがまさか同志社のすぐ北方が居住地の中心になる、場合によれば同志社のあたりまで住んでおったかも分からない集団のものだ、ということとはあまり気付かず読んでいるのですね。

出雲氏は、奈良時代にははっきりとおる訳ですが、いつごろここに移動してきたかということは、全く分かりません。先程の上御霊神社の付近から出土した弥生式土器、包含地ですね、これが出雲氏のものかどうか、それはとても分からない。しかし、やはり京都市内では比較的早くから安定した土地だったのでしょうね。だから、のちに「出雲氏」という大きな集団の一つの根拠地になった。この出雲氏はもちろん丹波のほうを通りまして、現在の島根県のほうから移動してきた大集団であります。

それからちょうど同志社の敷地には、西暦

六世紀ごろからの土器（須恵器）の破片はパラパラと出かけました。大量ではないですけれど、これは新町でも出れば、大学図書館の下からも出ていますし、女子大からも出ています。ですから、いづれ同志社のどこかで、やはり西暦六世紀か七世紀ごろの、ちょっとまとまった遺構が出る可能性はあるでしょうね。

秦・八坂・賀茂・和爾などの集団

それからついでに申しますと、京都市内で平安京以前に住んでおった大きな集団は、出雲氏が同志社の北におったのと、それから現在の八坂神社あたりですね。これは八坂造、その八坂造の氏寺が現在の八坂の塔と呼んでおる法観寺で、あの塔自体はのちの建物ですが、あの下には飛鳥時代の塔の心礎がダブっておる訳です。それが八坂氏の氏寺だろうといわれているんですが、それは高句麗系の渡来人たちですね。

それから西のほう、嵯峨野へいけば、これはもう日本最大の集団といっている秦氏が多く、その遺跡を残しております。秦氏については中国系の渡来人という説もあれば、最近の学

説ではむしろ、新羅系ではないかという説が有力です。秦氏は稲荷、深草の方にも住んでいて、稲荷神社も秦氏の関係で成立したようです。

そのほか、この界隈で賀茂氏、それから和爾氏も大きい。小野、栗田、大宅、春日などの氏に別れていて、岩倉、山科、それに東山山麓などに居住していました。

安岡 丹波からやってくる場合に、峠が幾つもありますね。例えば石仏峠なんていうのはそうだと思いますけれども、どこと限らずに幾つも経路を經てくるんですか？

森 交通路というのは、現在人間がよく通る交通路とはダブっているでしょうね。

出雲のほうから人間が移動する過程は、四角い古墳でよく残るのです。つまり、われわれは方墳と呼びますが、方墳が出雲の特徴的な古墳で、丹波の亀岡とか綾部とか、周山とかにあるのです。京都市内では、八坂神社の裏山にも大きな方墳がある。ですから、ちょうど島根県なんかから動いてきた人たちを、考古学的にはいま言った方墳でたどっていくのは復元できる。ただし、京都市内の家屋の密集地ではもうなかなか確認がむずかしい。

安岡 引き続きいて平安京のころの話もあわせてひとつ……。

平安京營造のころ

森 平安京ができた当時同志社はどうかうか。同志社の一番南の今出川通りから平安京の北の端まで、ざっと三百メートルあります。というののは一月ほど前に京都御所の東北部で平安京の一番北の端の線が掘り出されたのでよく分かる訳であります。

それでは、平安京時代の同志社のあたりは、どの程度ひらけていたのか、実は、発掘いたしたしても平安京が営まれた当時の遺物は少ないのです。その当時はまだそれほど人間が密集し、立派な建物が造られた形跡は少ないようです。やはり農地や原野が主で、大きな集落がつづくといった景観ではなかったかと推定しております。

横山 基本的には建物があったというような感じではないですね。農地というよりも草っぱらとか、荒地地みたいなものでしょう。

都をつくるるときというのは、どうなんでしょうね、水田があるとか、そういうところへつくる訳じゃないんでしょうね。現在みたい

に農地をつぶして町をつくるというようなことなのか、例えば荒れ地を切り開いて都をつくるのか、それともちよっとしめつたところをかわかしてつくるのか、そういうことがものすごく興味ありますけれど。

森 ぼくの推定では、やはり人間のかかなり利用しておるところを利用することが多いだろう。例えば大阪の難波宮の跡でも難波宮をつくるときにかなりのお百姓さんの家を移動させたようですね。その下から竪穴住居跡が出てくるし、平城京の地下からもそれ以前の集落の跡が出ている。だから、もちろん一部は荒れ地のようなところもあるでしょうけれども、かなり人間が住んでいる。いろんな意味で開けた土地、水の面とか、交通の面とか、いい条件のところに都にしたのではないかと思うのです。

小野 そうすると、いまでいう再開発だった訳ですね。(笑)

水の問題

横山 少なくとも水がないとできないでしょうね。

例えば現在の大阪なんかだと、大団地の

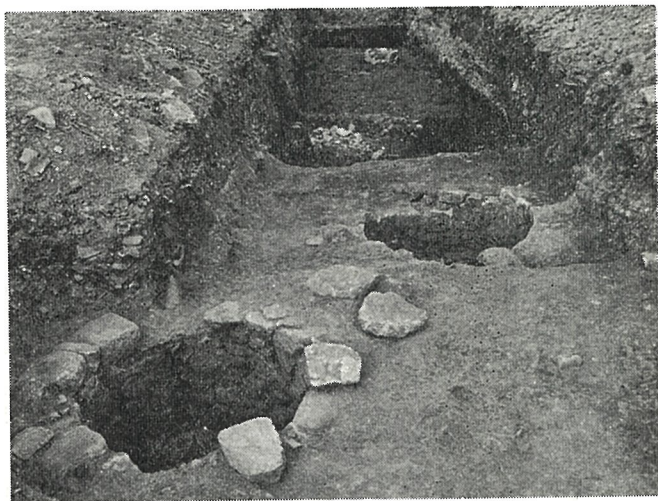
きるところは水のないところで、水がないから集落ができなくて、だからあいてたから団地ができるという三段論法がひじょうによくあてはまる。千里とか香里とかいうのはみんなそうですね。

小野 賀茂川との関係からいえば、地下水は比較的浅いところまである訳ですね。

横山 その点ではひじょうにいいところですね。

小野 そうすると、その当時の人は流水を利用した訳ですか、それともやはり井戸を掘ったんでしょうか。

仲村 京都は井戸のひじょうに多いところで、これも地質のほうの横山先生のほうから言っていただけばいいと思うんですけど、かつては湖であって、その湖の一番底のなごりが神泉苑のたまりになっておるといような話があります。平安時代や鎌倉時代、室町時代の記録を見てきますと、常盤井とか、少将の井とか、そういう「井」のつく地名が沢山ありますし、ですから、人が住むようになれば相当そういうものが掘られるんじゃないか、というふうに思うんですけれどもね。



江戸時代の井戸（大学図書館建設地点検出）

横山 京都の井戸水はひじょうにいいと思いますね。同志社もいま実際に井戸くんを使ってますけれども、この辺はひじょうにいいところなんです。いわゆる湖だったという話はだいぶ古い話

なんですけれども、基本的には巨椋の池が最後の残りで、神泉苑になりますとどちらかというと複合扇状地の末端の泉のあたりというふうに言ったほうが正しいと思います。その複合扇状地の中——だいたい複合扇状地というと御池通りより北ぐらいと思っていだいた結構です。どこ掘っても井戸水があつていいところですね。それよりちょっといって、西大路の西のほうなんかへいって、こんどはむしろ沼地みたいなところが多かったんじゃないか、まだ湿地帯が残っているはずなんで、平安京のころでも、やや湿地帯が残っている。

仲村 平安京の規模を一番よく伝えている地図に、『拾介抄』に収録されている地図があるんです。これによるといまの西大路あたりはほとんど小泉ばかりですね。ですから、平安京がつくられたといっても、つくられた当初から朱雀大路から右（西）のほうはあまり人が住めなかったということじゃないかと思うんですけれ

どね。

林 だいたい人口どのくらいが当時の都なんですか。

仲村 『京都の歴史』の中の「近世の胎動」という巻ですかね、第三巻だったと思いますが、室町時代の人口を推定しておる記事があって、確か、応仁の乱前でおおよそ十万ぐらいと記憶しています。

遺構までの深さ

原 横山先生、図書館を調査していただいたとき、堆積層が見えましたね。上流に出るれきがどういように運ばれてきたかを見ますと、ある程度流れが推測できるんじゃないですか。

それからもう一つ、平安朝の地表面ですね、このあたりでどれくらい堆積しておるか、その点はいかがでしようか。

横山 後半の部分については先程言ったように、ところによって違う訳です。女子大と、大学の図書館と、それから新町ともちろん違いますし、あらゆるところが違う訳で、発掘データを全部プロットして、その等高線引いたらどういことになるかをやってみた

いと思っています。平安京ができたときにはのっぺらぼうな地表面ではなくて、川や谷がいろいろあるんですね。そこへ建物が建って、結局最後には全部いっしょになってしまつて、近世以後に平面になっているということで、だから最高三メートルか四メートルの高度差がありますね。それから最低はいまの地表面が平安京というところまであります。だいたい図書館の場合は二メートルから三メートルぐらい……。

原 それははっきり確定ができませんですが、平安朝時代と……。

横山 下の堆積層については、先程おっしゃったように、分かる場合と、分らない場合とがあります。例えば京都ですと、北山全部同じなんです。いわゆる「秩父古生層」というやつで……。ところが、実際に賀茂川と高野川のれきをうちの地学実験の学生にとらせて全部調べたら、ものすごく違うんです。それでいくと、同志社の校地は高野川の影響は受けていないということになるんです。それから、水の流れは堆積層を見たら分かりますけれど……。

原 私ども、感覚的にどうも賀茂川がいい

かげんなところを昔はつつ走っておったのではないかというような印象を受けるんですけど、現在の（地下水の）水位とかいうようなもので、ある程度推測できないんですか。

横山 できません。現在の地下水位については京都市なんか、ずうっと経年変化測定をやっておりますけれども、やっぱり雨が降ったら上がりますし。烏丸線のボーリングのあともやってたんですが、それなどを見て、地下水の水位自身から過去の地形を推測するということはできないと思います。

ただ、これも調べてないんですけど、賀茂川の改修工事をして、あそこに護岸工事をして石垣つくったら井戸が枯れたという話がありますね。で、どこからどこまで改修工事をやったら、どここの井戸が枯れたかというのを系統的に調べたら、案外分かるかもしれないとは思ってますけれど、そういうことやっている人がいないもので……。どちらかというと自然科学だけではだめなんです。ちょっと境界領域みたいになりまして、できなくなってしまうんです。

原 ぼくの郷里、伊豆に狩野川というのがあるんです。頼朝が流された蛭が小島は、山

に近いところにあるんですが、昔は狩野川が流れておたらしいけれど、現在は一キロ余りも西のほうを流れているんです。そんなことを考えると、賀茂川も洪水のときにかなり荒れて水路が変わったのじゃないか、その昔に。そんなふうに思えてならないんですけれど……。しろうとですから。

横山 川の場合は人間が住みつくことややくしくなるんですね。直しますからね。直してくれないはいんですけれど……。

京都の井戸

森 京都の場合は確かにきょう話題になっているように井戸がひじょうに多いということですね。どこを掘っても井戸が出ます。同志社の場合は、あまり古い井戸はいまのところ出ていませんけれども、平安京内のどこを掘っても沢山の井戸に当たります。そして、先程からおっしゃるのように、地下水位が浅いですね。だから、平安京がそのままずっと現在の京都にいたるまで大きな町で続いているという一つの大きい理由は、水の問題がからんでおる。もちろんいろんな要因もあるけれども、水の問題が大きいでしょうね。

古い時代の井戸は、ひじょうに丁寧につくられて、いちばん多いのが板井なんです、板でつくってある井戸。その場合もくりぬいたまゝの井戸があつて、そういうのが人の名前に残っていると、「筒井」さんなんて、なる訳ですね。それから角い井戸もあります、これは「角井」。使い古しの鍋とか釜の底の穴のあいたのを沢山重ねて井筒に使っているのがありますが、これなんか「鍋井」さんとか、「亀井」さんとか、いろんな人名にも反映する。もちろん石組の井戸、これは「石井」ですね。それから京都府庁のところの発掘で瓦を積み上げたきれいな井戸が出ていましたね。だいたい井戸の種類はそのぐらいで、やはり素掘りのままの井戸は少ないようです。土の面がつぶれますから、何かで保護している。

小野 必ずそれはくみ出すという形をとらなければだめですか。わいたらそれは井戸といわないですね。

森 上まで水がわいたら泉でしょうね。ですから、井戸を底まで掘っていきますと、よくつるべが残っています。あるいはつるべの底だけ落としていたり、それから一種の網の

ようなものをかけてつるべのかわりにした、土器の表面がばい斑点のようになってすり減つたようなものが出たり、よく水が出るようにということ、土器に墨で「神」などの信仰上の字を書いたり沈めたりしていますね。図書館の敷地から出た石の井戸は現在保存してありますね。

原 あれはいつごろの井戸でしょうか。

鈴木 江戸時代です。

仲村 鎌倉時代、室町時代に京都に魚介類を扱う商人が——当時これは供御人といひますけれど——おるんですが、そういう連中が商いをするところはだいたい、いまの錦通りの延長ですね。あのラインでやっておるんです。結局あのラインで魚介商の店が立つといふのは、やっぱり水に関係があると思うんです。鮮度を保つためにどうしても水をぶっかけなければいけない。だから、現在、錦の商店街があの地に残つたのは、やはり井戸といひますか、地下水と密接に関係があるというようなことを言っている人があるんですけれども、確かにそうじゃないかと思うんです。いまはもう阪急の地下鉄工事でどうなつたか知りませんけれども。

小野 京都の井戸の深さは、ほかの町と比べて深いほうですか、浅いほうですか。

横山 浅いほうだと思います。

小野 そうすると、きのう、おととい降った雨が影響するような井戸ですね。

横山 そうです。すぐ影響します。

安岡 それでは、少し時代を下げてお話しただけたらどうかと思います。

応仁の乱前後

鎌倉、室町、応仁の乱あたりまでのことについて、仲村さんからちょっとお話いただけませんか。

仲村 平安時代の終りから鎌倉時代、室町の初めまで、同志社界隈はどうであつたか、一条から北、北辺（きたのへ）の北はどうなつておるかということなんですが、これは平安時代の中ごろから人が相当住みついてくるんじゃないかと思うんです。

例えば平安時代の終りごろの貴族の邸宅、特に有名な藤原定家の邸宅の北辺の邸宅というのは賀茂川のふちにある訳でし、それから女子大の東側に毘沙門町という地名が残っておりますけれども、相当大きな寺ができて

おるようです。この町名は毘沙門堂があったことにはじまる訳ですが、毘沙門堂というのはだいたい桓武平氏の子孫が建てた三つの寺、それをのちになってこれまた平氏の流れをくむ平親範が坊主になって円智というんですが、これが先祖が建てた三つのお寺——平等寺、尊重寺、護法寺——が荒廃しかけておったのを一か所に集めてお堂をつくった。それが毘沙門堂なんです。ですから、仏像はそのお寺にあった仏像を一か所に集めて建立したのが毘沙門堂ということなんです。その建物は当時有名で、特に境内にある桜は、鎌倉時代のいわば洛外の名所になっておるといふことです。

それからもう一つ。この近辺で忘れてならないのは平安京の東北の角っこがだいたい北畠邸なんです。北畠というのは御存知のように村上源氏の後裔で、われわれが小学校のとき習った北畠親房とかいう連中の邸宅で、この邸宅の向かい側というと、今の寺町今出川の南北あたりが、北畠の散所といわれまして、散所と申しますのは、特定の荘園領主といえますか、特定の貴族それから寺院、神社に隷属しておる人たち、ないしはその人たちが

が住んでおるところ、これを散所というんですが、そういう散所があります。

それから同志社から北をながめると、これは先程から出ております御霊の森がうっそうと茂っておって、その東側に唱門師池という池がありまして、これも鎌倉時代の貴族のリクリエーションの場になっております。

それからその当時は相国寺、われわれ今日「ソウコクジ」といっておりますが、正式には「ショウコクジ」なんです。相国寺はできてないんですが、そこらあたりは一带に竹やぶであって、のちに相国寺のやぶというのには歌にもよめますようにひじょうに有名で、現在でもやぶの一角が残っておりますけれども、そういうようなうっそうとした場所であったと思います。ここらあたりも、おそらく平安時代の終りから鎌倉時代の初めにかけては、北畠の散所ができておりますように、すでに集落というものができておったんじゃないかと思えます。

では、平安京の実状はどうなっておったかといえますと、かつての平安時代の貴族の邸宅の面影はすでになくなっていきます。つまり代表的な貴族の邸宅の様式といえますのは寝

殿づくりですけれども、そういうものではなくなっております。かつての貴族の邸宅には一般民衆の掘った小屋程度の家並みができておって、あるいはその中には麦畑や野畑ができておるといような景観がおそらくあるんじゃないかと思えます。そして平安京の道路というのは法律によってどの大路は何丈、どの小路は何丈というようにきめられておるんですが、そういう規則はすでに守られなくなつて、道路に屋敷がはみ出したり、掘り返されて畑になったり、あるいは湿地帯であれば田んぼになったりとか、そういうような景観がだいたいこの同志社界隈、特に北辺といわれる地域の景観じゃなかったかと思えます。

それから、相国寺ができてこのあたりの景観が全く変わります。それ以前に、いまの烏丸通りと室町通りと、それから今出川通りと上立売通りにはさまれた中に室町幕府の建物ができて、それを中心にしていわゆる政治都市といえますか、当時の日本の政治の中心となる建物が建てられます。これを中心に守護大名の邸宅であるとか、公家屋敷であるとかいうものが続々と建立されます。そこへもつて、相国寺が十四世紀の終りに建てられるん

ですが、建てられた当初はなかったんです
が、十四世紀の一番終り頃の一三九九年です
が、ここに七重の塔が建てられます。

相国寺七重の塔

これは高さ三百六十尺といわれています
が、今の尺度では二百三十尺ぐらいで、メー
トル法にいたしますと、約七十メートルの高
さの塔が建った。この塔は足利義満によつて
建立される訳ですけども、その義満が亡父
の義詮という二代將軍の三十三回忌を記念し
て建てるのが、この七重の塔なんです。

これは、当時の公家の書いたものによりま
すと、岡崎の法勝寺の塔にまさるとも劣らな
いりっぱな塔であつて、法勝寺の塔というの
は、八角で九重の塔であります。法勝寺がつ
くられたのは院政の最もはやかなりしころ
で、当時の人のどぎもを抜いたひじょうに奇
抜な建物であつたんですが、それと同じよう
にこの七重の塔もどうも奇抜さをもつておつ
たらしい。

どこに建てられたかと申しますと、毘沙門
堂の南、富小路の東といえますから、いまの
毘沙門町と塔之段町にまたがるところじゃな

いか、そういう記録があるんですけども、
ばくは毘沙門堂の境内の南のあき地に建てた
んじゃないかと考えております。なぜこれを
と、ひじょうに奇抜なために、在来相国寺
の建物どうもそぐわないから、境内の外に
建てたというように書かれておるんですが、
それほど奇抜な塔であつたらしい。当時の相
国寺の有名な僧侶で、瑞深周鳳という僧侶が
おるんですが、これがその塔の一番てっぺん



室町時代一石五輪塔 (女子大学デントン館前検出)

に晩景に登つて四方八方を見回したら、何と
もいえない気持がする。下から風にあおられ
て聞える人の声は鈴の音のように聞える。そ
ういうようなことを七言絶句の詩で読んでお
るんですが、そういう塔が建てられた。

ですから、いままでの北辺の景観とまった
く違った景観が、少なくとも十四世紀の中ご
ろからあとに出てくることになる。やがて、
これが応仁の乱によつて灰燼に帰す訳ですけ
れども、この七重の塔は応仁の乱の初めには
まだ焼けていない。文明二年に雷が落ちまし
て、これで焼けてしまふんですが、建立され
て以来七十年間、この北辺に君臨した一番高
い建物が、この七重の塔だということになる
訳です。

この応仁・文明の乱のあとどうなるかと申
しますと、公家・武家の邸宅は焼けるとすぐ
に建立されておるようですけども、今までの
規模ではとうてい建設されなない。では、そ
のあいたところはどうかといえますと、いわ
ゆる図子町というのができてくる。つまりい
まままでの大きな邸宅のあとに縦横に、または
斜めに小路が貫かれて、その両側に庶民の家
が軒を並べて建設されてくる、そういうよう

な景観にやがて変わってくるんじゃないかというふうに思います。

それから一つ大事なことは、御所のことですけれども、十四世紀の後半、南北朝が始まったところ、かつて大極殿に御所があったときの里御所の一つである東洞院の土御門というところに、土御門内裏という里御所がありまして、それが拡大されて今日の御所になってくる訳ですが、始まりもだいたいこのころです。ですから、現在の今出川あたりの最盛期は、やはり土御門内裏や室町幕府の建物、それから相国寺の建立、このあたりが一番はなやかな時代ではなかったかというふうに考えております。

室町幕府と花の御所

安岡 室町幕府がこの地に定められたということについては、何か特別な理由があったんでしょうか。

仲村 はつきりは分かりませんね。ただ、こういうことが考えられます。鎌倉時代になって、御存じのように鎌倉幕府の御家人が大幅催促で幕府に召されて、御所の警備をやらなといかんことになるんですね。だから、

だいたい堀川界限、それからオガワ（小川）と今日いっておきますけれども、現在暗渠になっておりますが、コガワと古くは言うんですけれども、堀川と小川、それを中心とするラインに武家の大番催促のときの屋敷ができるんです。三条、四条辺にあった足利氏の屋敷がそういうところに進出し、拡大したんじゃないかというふうに考えられます。

森 いまの安岡さんの質問、ばくもおもしろいと思うのです。というのは、室町幕府は平安京のなかにつくってない訳でしょう。つくろうと思ったらできたと思う。それほど大きな敷地ではない訳ですね。それから平清盛のときの六波羅の政庁もやはり平安京の外、東へ出ていますね。その時の実力と古くからの伝統とは、やはり分けていたのではないでしょうかね。もっとも秀吉の聚楽第は平安京のなかへつくっている訳ですね。

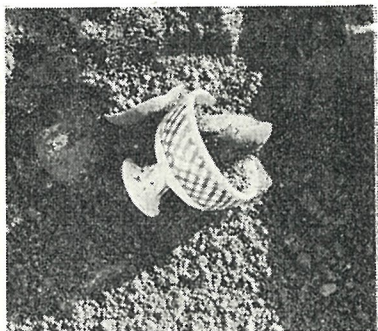
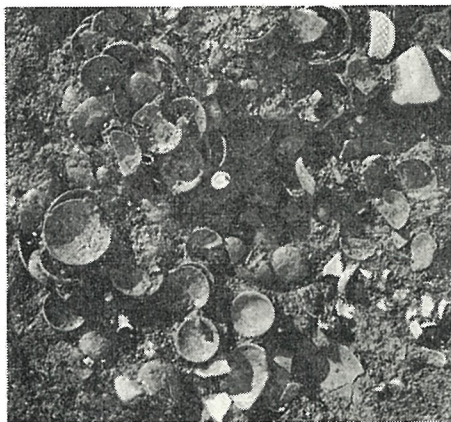
鈴木 いま仲村さんのほうから、中世までの、同志社を中心とするこの界限の景観というか、歴史の変遷をきれいに描いていただいて、まぶたに浮かぶようなんですけれども、ちょうどその時期、中世の後半ですね。そういう時期に関して校地学術調査委員会のほう

で発掘調査をした最近の二カ所、それに関して若干資料を提供させていただいて、それに関連してまた自然科学の林先生の御意見も伺いたいと思います。一つは、実は新しくできました新町別館の地下に、応仁の大乱直後の時期にかなり短時間に埋め戻したんじゃないかと思われる濠跡がありました。この濠はかなりながく東西に延びていくんじゃないかと私たち予想している訳です。近いうちにもう一カ所確認したいと思っている訳です。

それともう一つ、女子大学の敷地のなかで、ちょうどデントン館の前を調査させていただいた際に、室町時代の後半の、一六世紀に入っている遺構で、タイの骨だとか、貝ですと、おいしいアカニシやサザエなど、自然物のかんりの遺物を出土したピットが一か所ありました。そのピット中の土壌をじつは林先生のもとで研究していただくように資料をお持ち願った訳ですけれども、あの研究結果はいかがでしょう。

林 いや、じつは忙しくて、まだ袋に入っただまになっておりまして、申し訳ないと思っておりますけれども。

鈴木 あの時期にはなかなかおいしいもの



(右) 江戸時代伊万里系磁器

(左) 江戸時代雑器類

(女子大学デントン館前検出)

を食べていたようですね。

今出川界隈の食べ物屋

林 じつは私、最近お菓子の歴史の研究をやっております、川端道喜さんのところへ行っているいろいろ聞いたりしておりますと、川端ということで、川のあったところにいたんだらうということで、鳥丸辺に川があつて、どうもそこら辺にいたんじゃないかというお話を聞きましたんですが、唐菓子といまして、中国から菓子が入って、それはいろんな文献に載っておりますけれども、いまそういうものが上賀茂とか下鴨に少し残っております。そんなことを調べたりしております。

仲村 一つ言い落としたんですが、応仁の乱以後庶民の町ができてくるということに関連するんですけども、それ以前から京都には造り酒屋がひじょうに多うございまして、『北野神社文書』の応永三十二年というと十五世紀の初め、応仁・文明の乱の前のことなんです、それは三百四、五十の造り酒屋の住所と名前が全部出てくるんです。それにようになりますと、だいたいこの同志社の界隈では十軒くらいの酒屋がありまして、近いところで

は相国寺の門前、それから今出川出雲路、そういうところですよ。もちろん造り酒屋といっても、一石の素焼の壺がだいたい十五から二十、多いところで百五十くらいの酒をつくる規模の酒屋、そういうものができています。酒屋は京都では建仁寺界隈が一番多いんですけども、ここらあたりにもできてくる。学生時代、金がないときに飲みに行った酒屋に「菊養老」というのがあったんですが、あれなんかは今出川出雲路の造り酒屋の名残りじゃないかという気がします。今出川通りにはいまでも千本通りのほうに造り酒屋があります。そういうものが点在しておったということが、やはりここらあたりの一つの景観になるんじゃないかと思います。

笹田 相当あった訳ですね。

仲村 そうですね、三百四、五十軒あります。酒屋といっても、土蔵が景観的には指標になるので、あとは板葺の家じゃないかと思うんですけども、酒屋というのは土倉、つまり高利貸しを兼ねておりますので、そういう規模のものがあつたんじゃないかと思っています。

掘り出された中世

森 いま仲村さんが文献のほうから説明された時代になると、遺物の上からも同志社の界限はひじょうに多くなっている訳で、当時の中国製の青磁類がひじょうに多いですね。

中国の青磁の割合は、全焼物のなかの五％くらい、あとはやはり日本各地の焼物を使っておりますね。そのなかで、常滑とか、備前とか、丹波とか、そうしたたれつきとしたものも使っておりますが、やはり最も多いのは、奈良とか、山城とか、この辺でつくっておったほんとうの素焼きの皿や碗、ひよっとしたら弥生式土器よりも質が悪いと思うほどの粗製のものですけれども、そういうものを大半使っておるようです。

それから古銭が同志社の地下はひじょうに多い。時代的にいいますと、中国の宋銭ですけれども、宋銭といっても、宋の時代に使っておったものばかりではなくて、秀吉、家康のころまで残る訳ですけれども、宋銭の量は三カ所で何枚出ていますか。

鈴木 三〜四十枚は出ていますね。出土している宋銭で古いところは天禧通宝くらいじ

やないですか。

森 それから硯が室町時代に多いですね。

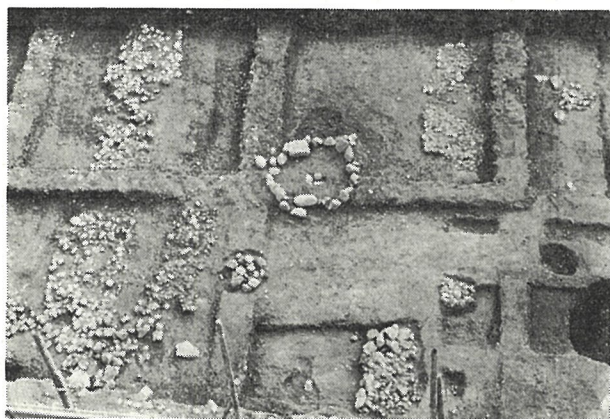
その硯のなかには普通のものもあるし、細長い硯があるのですね。何に使うのかと思っていたら文化人が集まって連歌をつくるときに、横に置いていた硯が細長いもののようにですね。そういうものが出てくるから、やはり庶民の家も混じるし、またある段階では貴族の家も混じったりするのですね。

それからりっぱな貝であるとかタイの骨が出るのもこのころですね。同志社界限だけではなくて南蛮寺のあった四条のあたりを掘りますと、魚類、貝類、それから獣もあのころ相当食うのですね。

そういうものの骨がひじょうに多くなるのは、やはり室町時代から交通が盛んになったからでしょうね。

安岡 そのころの遺跡はどの辺に埋まっているんですか。

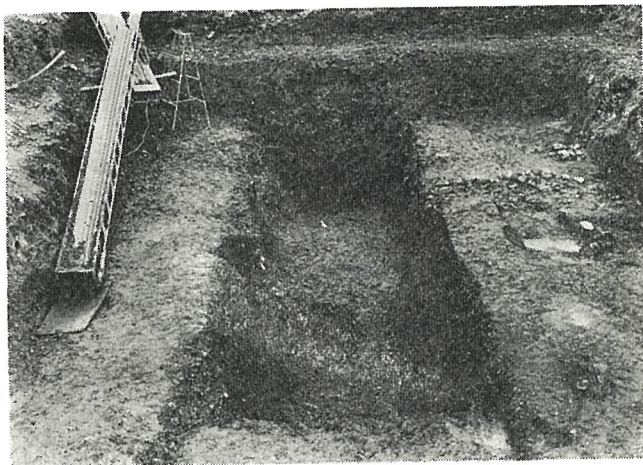
森 それはさっきふれられたように深さが場所ではじょうに違うのです。ですから一カ所試掘して、それで通用すると思ったら大間違いです。どういことかという、地下から土を取るのですね。



近世・近代の配石遺構群（女子大学デントン館前検出）

例えば後世大きな穴をあけて壁土を取る。あるいは天井にのせる土とか、屋根瓦の下の土とか、いっぱい取るのです。ですから、必ずしも一番底がその当時の生活面じゃないんです。逆に、牛の角みたいになんともとの土が突き出ていたりしましてね。京都の地下は

人間が錯綜して各時代に住んでいるから、これはかなりむずかしいですよ。考古学では層位的発掘というのをいって、水平に物がたまっていくように思うけれども、京都ではそれは通用しないのです。



室町時代の掘跡（新町別館建設地点検出）

新町学舎の応仁の乱の溝

安岡 先程、新町に溝を掘った跡をもとに戻された形跡があるとおっしゃった。そういうのはどのくらいのところですか。考古学の遺物というのはたいいてい埋っておりますね。例えば古い時代でしたら、川の氾濫とか何かで埋ったということはある訳でしょうけれども、かなり新しい時代、例えば江戸時代の直前の段階のものでも埋っている。そういう土はどこから来て、何センチなり何メートルなり埋めるのか、それはいかがでしょうか。

森 応仁の乱の濠の上に一メートル五十ばかりの土がありますが、やはりあの場合も洪水があつて……。

鈴木 あれは一べん整地して、そのあとに洪水で流された形跡がある。さらに建物建って、焼けて、また整地するというようなことが繰り返されている。江戸時代に入ってからかなりあるようですね。

それから、先程安岡先生が言われました点で、同志社の敷地のなかに限って言うと、地

点によって違う訳ですけども、新町の地点と女子大の地点で言うと、室町の後半の生活面が新町の場合で二メートルくらい、女子大の場合は一メートル二十くらい現在の地表の下に埋っています。

安岡 洪水のときには、そういうものが重なって埋っていく訳ですね。

災害と京都

森 遺跡が下へ下へ下がる訳じゃなくて、上へ上へ土がたまるのでですけども、やはり洪水が最大の原因で、その次に、火事なんかがありますと、その残骸を穴を掘って埋めるのです。これは火事だけじゃなくて、洪水が運んできた石なんかも、大きな穴を掘って埋めております。これは図書館の敷地でも出ました。それともう一つは、いまのようにオルゴールを鳴らしてゴミを回収に来る訳じゃないですから、日常生活の廃棄物をそれぞれの敷地のなかに埋めるんです。その場合に、敷地が狭いので、奥のほうで袋状に開いたような穴を掘ってゴミを埋める。そして一年とか二年とか使うのですね。それに埋め込むとまた掘っておりますね。だから、主としてその三

つがあるのでしょうね。

鈴木 そういうゴミだめのなかの遺物というのは掘っていてもおもしろいですね。

森 ゴミだめは考古学ではひじょうに貴重なんです。つまり年代が限られた間に埋め込んでおる訳ですね。ですから、一括遺物として年代の決め手に使えそうですね。

小野 古いお金は、いろんな所からいろんな形で出てくる訳ですか。

森 そうですね。一カ所に意識的に埋めたという状況ではなくて、極端な場合には、そういうゴミだめのなかから貝なんかといっしょに出ますね。

小野 どこかで落としたとか……。

森 わりあい乱雑に、というとおかしいですが、出ておりますね。

鈴木 お金といえば、ごく最近まで寛永通宝を使っていたんだなと思ったのは、女子大の調査をしたとき、デントン館の前、ゼームス館あたりまで芝生がございましたね。あの一角に灯籠があって、その灯籠の石がぐらつくのをとめるのに、寛永通宝を九枚かさねて詰めている。そういう形で使われておりました。通貨以外に結構お金も用途があるんだな

と買ったんですけれども、あれは石屋さんに聞きますと、現在でもその名残りがあって、銭を詰めるというのは、灯籠を立てる際の一つの方法に残っているんだそうですね。

笹田 洪水や火事のお話があったんですけども、仲村さんがお話になった時期に地震はなかったんですか。理化学館の地震の心配がいつも同志社でいわれますけれども(笑)……。

鈴木 例の慶長三年の地震は大きい訳ですね。

横山 地震は、木造家屋では考古学的に残らないんですね。モヘンジョ・ダロなんかは、ひじょうによく残っておりますね。つぶれた上を整地しまして、その上にまた同じものを建てている。下はレンガが割れたり積みが悪くすれたりした跡がありますが、上にきれいなものがのっている訳です。

笹田 京都は地震が少ないですね。

横山 京都は、いわゆる歴史的に残っている地震の記録は世界一なんですね。

笹田 回数が多いということですか。

横山 ええ。それは書く人間がよけいいたということですよ(笑)。平安時代から通じて。

笹田 一番長く記録できたということですね。

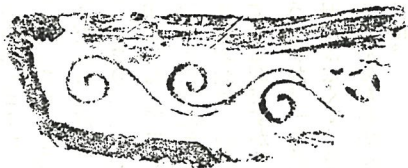
横山 北海道なんていくらありましても、だれも書かない。記録にとどめない訳ですが、京都は世界的に古くから地震の記録のあるところなんです。したがって、一番多いということになっております。

原 京都の場合、地震の周期というのは何年くらいですか。それとも一つ、一番大きいのが最後にあったのはいつかということにしようと思います。(笑)

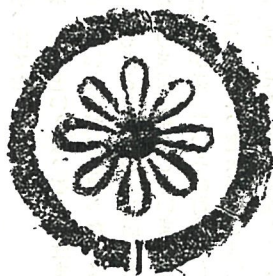
横山 いわゆる八十年周期というのがありますね。それはだいたい過去の歴史的記録からきているので、これはほかには記録がありませんので、京都付近の記録が一番主になって考えられていることですので、八十年ぐらいというふうにお考えになっていいんじゃないですか。それからもう一つ、一番大きいのは、近畿地方では南海道のときですから、あれはいつでしたか。

原 昭和ですね。

横山 ただ、地震というのは、常時揺っているとかまわなくて、ずっとないと大変なんだそうですが、遺跡として地震という



(上) 江戸時代唐草紋軒平瓦 (女子大学校地内検出)



江戸時代小菊紋瓦
(女子大学校地内検出)



ども、近
世に入り
ましても
よろしい
ですか。
安岡
どうぞ、
そのほう
も。

のは残りにくいのではないかと思いますね。

原 図書館のとき、応仁の乱、それから江戸時代に二、三回大火があつて、炭が層になつてゐる、そういうことを教わつたんですが、女子大とか新町のほうはいかがですか。

鈴木 あります。女子大でいいますと、大きく分けてやはり三つですね。新町のほうでも、大きな火災はやはり三回だと思ひます。地表に近く、薄い火災の層がありますから、それを加えて四回は確実にあつたと思ひます。新しいほうの火災は、例の西陣の、どんな焼に相当する訳です。

先程、維新のころがちよつと出ましたけれ

上京の歴史

鈴木 実はきょうも新入生がかなり学内を歩いている訳ですね。たまたま新町のほうへ寄つてみたんですけれども、あの界限は織屋がかなりある訳ですね。当然西陣織というところで、織屋さんの歴史なんかについても、学生諸君は知れたがつてゐるようになっていますし、もう一つは烏丸通に面した入口のところに例の薩摩屋敷の碑があつて、あの碑をなでながら、こんなところにあつたのかと、言つておりました。ここらあたりは、京都の産業のほうと、近世末の薩摩あたりとも関係がありますので、産業も含めて、お話いただきましたと思ひます。

安岡 その前に、仲村さんが上立売の話を書いておられますので、室町幕府にもふれながら簡単にお話いただきましたら……。

仲村 室町幕府の規模としては洛中洛外図屏風に天文ごろの「花の御所」の姿がうかがわれますが、武家の邸宅の大きなものと考えていいのではないのでしょうか。ただし、なかに侍所とか、御家人などを支配するための事務所というか、人のたまりがある程度じゃな

いかと思うんですけども。花の御所というのはいろいろ説がありますが、四季とりどりの花を植えさしたということ、威厳を花にたとえて、世の人がそういうふうと呼んだんじゃないか。

現在、むこうの跡に、例えば裏築地町とか、築山半町とか、そういう名前に名残りをとどめておりますけれども、やはりちょっとした規模の濠はあったように思うのです。今出川新町に堀出し町というのがありますね。

これは戦争のために深く、また広くしたこともあるんじゃないかと思うんですけども、これは『応仁記』に死体が埋って、どうにもこうにも仕方がないという話が出てきますが、この程度のもので、それから中世史をやっている人は御存じのように、法然上人絵伝に絵が出ていますね。法然上人が武家屋敷に説教に行く。そういう邸宅を数種合せ程度のものが、昔の平安京の方四十丈、これが一町なんです、それを二つよせたものが室町幕府の屋敷地の広さなんです。そのなかにそういう建物が集められておったという程度で、それも焼けておりますし、あとに礎石ぐらいが残っている程度じゃないかと思

うんです。

森 そうすると、その敷地を最大限に利用しても、日本列島の隅々まで政治的に管理するようないろんな施設をそのなかに盛り込むということとはできませんね。

仲村 中世史では、室町幕府というのは山城幕府なんで、山城一国くらいにしか正式には威令が届かないという、極端にいったらその程度のもんです。それは国家公権をバックにしておるということで、つまり征夷大將軍に任ぜられておるということで、全国的な支配権を掌握しているといっても、実際はせいぜい五畿内とその周辺くらいじゃないでしょうか。

森 そうすると、その程度のもんとして発掘にもかからないと、あまり大きなものと思いきやたら、瓦もなかなか出ないし……。室町幕府のその時代の瓦なんてほとんど分らない。

仲村 瓦は使っていないと思います。やはり檜皮葺でしょうね。寺院や何かが瓦を使う程度で、檜皮葺じゃないかとばかりは思うんです。

今出川豆腐

それからそのあとの話なんです、民衆の町ができてくるというんですが、先程お話に出ましたけれども、焼けたあとにどういう人が住んだかという問題ですね。これはいろいろな記録に出てきますけれども、雑多な商人や職人、大工とか石屋とか、それから西陣ができますから、織屋とか、いろんな職種の人住みついてくる。とくに室町の終りころですが、豆腐屋が目につくんですね。

これからちょっと誇張してものを言いますので、眉につばをつけて聞いていただきたいんですが、江戸時代に京都では、今出川、というのは今出川豆腐の代名詞なんです。たまたま、この座談会のために、小学館の『日本国語大辞典』の「今出川」のところをひっぱったんです。文献で洗ってみただけけれども、「今出川」というのは豆腐の代名詞である。どういう豆腐かというと、角切りの豆腐を昆布と酒・醬油で煮つけて、それにおろしショウガとワサビ、花かつお、ときにクルミの割ったものを振りかけて食べる。こういうようなことが書いてあるんですね。それ

そ眉につばをつけて聞いていただきたいんですが、やはり一つは禅宗の食事ですね。あるいは公家の食事、こういうものの折衷がおそらく、今出川」という代名詞となるような豆腐となつてあらわれてきたんじゃないか、というふうにはぼくは思うんです。とにかく室町時代にそういう豆腐屋ができてきます。

林 今出川豆腐というのは、室町のころの文献にあるんですか。

仲村 いや、江戸時代なんですけれども、その源流を溯っていけば、室町時代に豆腐屋があることはあるんです。禅宗の僧侶と公家の食事ですね。それはどういう相関関係があるか知りませんが、そういうことから今出川豆腐といわれるような一種の湯豆腐ができてきたんじゃないかと思うんです。

林 『豆腐百珍』という、豆腐を一〇〇種類書いた本がありまして、元禄のものですけれども、それを調べてみたいと思います。

安岡 西陣というのは、御承知のとおり応仁の乱の西陣の跡に機屋が勃興したといわれますが、その前に織部司とか大舍人座というのが御所の関係で織物の権利をもらつていて、それがひろがつて西陣織になっていく。

だいたい同志社の新町校地のあたりが中心だといわれますが、それから西へ及んでいる。

江戸時代の享保十三年に書かれた『町人考見録』という本を見ると、室町出水上に大両替商の辻次郎左衛門、室町下立売上に京阪第一の両替商、両替屋善五郎とか、有数の大金持ちができるんですね。そういう両替商を兼ねて大名貸しをやっているような大商人が立ち並んでいました。これらは、御所、貴族や室町の織物問屋とか西陣織屋につながるような両替商として、取引の必要から出てきたんじゃないかと思えます。

それから維新に入つたお話で、薩摩屋敷の跡が出てきたんですが、これはもとは相国寺の境内ですね。

相国寺と薩摩屋敷

仲村 天保八年のこの界限の地図には、薩摩屋敷というのはありません。慶応四年の絵図には出てまいります。ですから、ここはもちろん相国寺の境内なんです。今出川通りに中小の公家屋敷があつて、その裏側に禁裏護衛の武家屋敷があり、それが拡大して薩摩屋敷になったよう……。

安岡 相国寺に薩摩屋敷ができたのは明治

維新の直前の文久三年のようですね。それまでは薩摩屋敷の中心は錦小路東洞院東入にあつた。等持院にもあつて、三カ所に薩摩屋敷があつた。そのなかで一番大きいのはここです。それはあとからできている。三カ所の大名屋敷があるのは、薩摩藩と鳥取藩と彦根藩なんです。もう少し前を調べますと、江戸時代の後期の段階では、大名屋敷というのはだんだん減る傾向にあつたんですね。しかし、『京都の歴史』のなかで鎌田さんという人が書いているんですが、京都の政治に深く関与しようとした藩は、京都藩邸および藩の施設を強化していく。関心のない藩は京都から引きあげていく。そういう両極分解が起つたという。それで幕末政治のなかに大きく登場するような藩は、やはり京都で自分の拠点になるようなところをひろげていく。そのほかの藩も出てまいりますけれども、そういう動きのなかにこの土地があつた。それで薩摩屋敷が登場しまして、明治九年には同志社が入っていくという形になるようですね。

仲村 だいたい京都へ大名が上つてきまし

たらいわゆる何々藩の屋敷に泊まらずに、周辺のお寺に泊まりますね。鳥取藩であれば、西陣の電報局のところに大きな因幡屋敷があるけれども、そういうところに泊まらないで本園寺に泊まる。だから、おそらく薩摩もそういう格好で相国寺に泊まっていったんじゃないか。御所にも近いし、これは薩藩にとつては一番大事なところですから、そういう関係で薩摩屋敷ができて、そして戊辰戦争で死んだ薩藩の連中の慰霊塔が相国寺の横にありますね。相国寺、薩摩屋敷、その碑とやはり関係があると思います。

鈴木 現位置という形で確定することはひじょうにむずかしい訳ですけども、現在の同志社の字地名を見ると、有終館の北側と弘風館の間、明德館の裏ですね、この筋で一つ地名が変わる訳です。そうすると、北側のそのあたりに武家屋敷があつて、その一部に薩摩屋敷があつたというふうに考えていいんでしょうか。それとも、明德館の前の、例のメインストリートというんですか、その北側という形で薩摩屋敷を限定していいんでしょうか、どっちでしょうか。

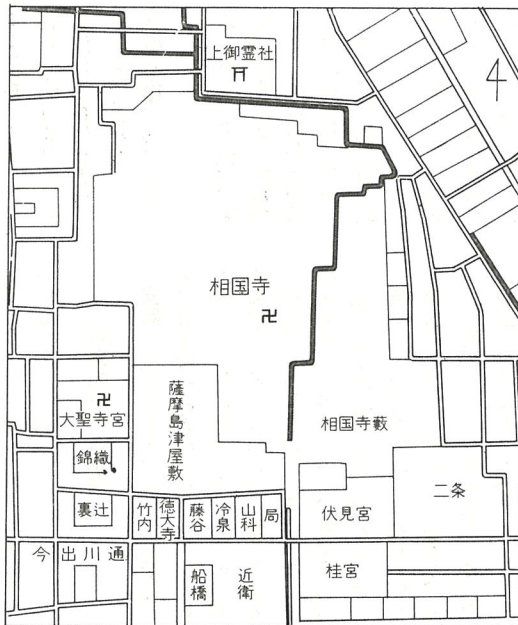
仲村 寛永十四年の洛中絵図を見ますと、

いまの今出川の一つ上の通りが相国寺石橋町、その上が相国寺門前町なんです。ですから、石橋町と門前町のこの道をつぶして薩摩屋敷ができておりますね。入口はどこにあるかというと、今出川通りの徳大寺と藤谷の公家屋敷の間に一つ屋敷をつぶして、そこから入るようになっておりますね。

公家邸と同志社

鈴木 そうすると、藤谷殿という屋敷が冷泉と徳大寺の間にあるような図があるんですけども、そこらあたりが薩摩の屋敷の入口だった訳でしょうかね。

安岡 慶応四年の地図があります。それが、それを見ますと、西のほうから竹内、徳大寺、藤谷、冷泉、山科、



同志社付近地図（慶応4年）
——『京都の歴史』第7巻別添地図から作図——

局、その六軒がちょうどいまの烏丸通りから大学正門までの幅になっておりますね。
仲村 徳大寺と藤谷の間です。それが道ですから、そこが門になっております。
森 薩摩屋敷というのは、いまの同志社の建物でいうと、どこが入つておった訳ですか。寧静館のあたりは……。

鈴木 中学校の立志館、あのあたりも含ま

れるんではいなかね。

仲村 建物はどうか知りませんが、
屋敷はこちです。むこうは烏丸、こち
は門前、それから今出川の裏側、公家屋敷の
裏側ですね。

安岡 ですから、同志社中学校とか理化学
館は完全に入りますね。

小野 いま大きなストリートになっている
あそこは、明治の初年に同志社が敷地をもつ
て以来、建物が並んだことのないところで、
奉安殿があったり、防空壕のために掘りちら
かしたりしたことはあったにしても、建物が
建ったことはないところですね。

仲村 その神学館の東のところに入口が
あります。あの通りが建物に行き当たって
おりますけれども、宗教部の建物と神学館の
間、それが石橋町の通りで……。

小野 それは通りが敷地のなかに取り込ま
れて……。

仲村 その一つ上に門前町があるんです
ね、門を出たところに。

小野 そうすると、第一寮跡とか、ینگ
ランドとかいう学寮がそのあたりに建って、
あとは原っぱだった訳ですか。

仲村 そのところはいくつもありません。ど
ういう規模の屋敷だったか分かりませんけれ
ども、その区画ははっきりしておりますね。

森 現在の同志社のキャンパスにも、若干
は近世のそういう町組みの面影が残っておる
訳ですね。

小野 明徳館のところにブラック教室があ
ったことははっきりしているんです。そこへ
建てられたというのは、その前に何か家があ
って、それをはらって建てたんでしょうか。

仲村 明徳館は、その前は、禁裏護衛の武
家屋敷の跡ですね。

小野 武家屋敷がなくなつたあとに何か建
つていたかという、大正のころにはまだバ
ラックの建物はない。それまでは家があつた
のか何があつたのか……。

鈴木 先程の天保八年の図で、良心碑のあ
る正門の角はお局ですね。

小野 薩摩屋敷はどうして手に入ったんで
すか。薩摩屋敷を直接手に入れたという訳じ
やないんでしょう。

鈴木 薩摩屋敷だけじゃなくて、先程のお
話にあった上御霊神社の界限の例の彦根藩の
屋敷ですが、それを同志社が買って、将来大

学にしたいということが明治の二十八年ごろ
の記録にありますね。

新島先生の占地法

安岡 新島先生が同志社の地を選ばれる際
に、現在の新島会館は御所の東、それから御
所の北の薩摩屋敷の跡と、御所のまわりを選
んでおられる。これは何か意味があるんじや
ないか、どういう意味で御所のまわりに土地
を定めようとされたのか、問題がありそうだ
と先程森さんと話していたんですけれども。

笹田 そのころ御所のまわりというのは、
全般的にどうだったんでしょうか。武家屋敷
があつたんでしょうけれども、やはり空き地
が多かつたんでしょうか。

仲村 ほとんど公家屋敷ですね。

笹田 公家屋敷というと、やはりお公家さ
んの後裔が住んでいたのでしょうか……。

森 東京へ都が移つたあとに公家屋敷はど
うなっていたんでしょうね。

鈴木 空き家が多かつたんでしょうか。

仲村 そこにだんだん御所を拡大して、空
き地にして、現在の姿に……。

鈴木 現在の御所のなかに、いわゆる町

家というのがかなりありますね。

仲村 あります。とくに大きい町家は、いまの御所の区画の東北の隅っこですね。女子大の前あたりからグラウンドあたりが町家ですね。

森 そうすると、同志社の土地には、長い目で見ると、まず出雲氏が付近に住んでおった。それからいろんな変遷があるけれども、やはり室町時代でしょうね。そして室町幕府に一部ひっかかっていそうである。それから同じ時代の相国寺ですね。そしてその次は発達してきた京都御所、そういう歴史的な土地を校地に選ばれたのか、それとも偶然にそうなったのかという問題がありますね。新島先生の意識のなかでとくにここを選ばれたのか、それとも入手しやすかったから買われたのか、その辺を見直す必要がありますね。

現代にのこる歴史の伝統

安岡 同志社の土地の歴史的背景、その周辺の事情というものを主体にはばお話しただいた訳ですが、このあと、今後の同志社のあり方と申しますか、例えば景観の保持とか、その他歴史を振り返って今後同志社はどう歩

むべきかという、その辺について諸先生から忌憚のないところをお話いただければと思います。

笹田 御所があつて、相国寺があり、大聖寺がある。大聖寺はもともと門跡寺院で貴族ですけれども、そういうものが同志社を点的に囲んでおります。これはこの界限にあまり急激な変わり方はないのじゃないかという気がします。うんと長いスパンで見れば別ですけれども、戦後になりましてからでも、京都全体がそうかもしれませんが、この界限はそう大きな変わり方はしていないんじゃないか。戦災で焼けた都市とか、あるいは人口が急増している都市とか、そういうところに比べますと、京都はほとんど変わっておりません。しかもこういう御所とか、大きなお寺とかが周囲にくっついていてところは、あまり大きな変わり方はしないんじゃないかという気がするんです。

全国の多数の大学の中で、同志社ほど緑があつて、それが建物の色を引き立たせ、閑静な、風格のあるキャンパスになっているところはあります。京都の業務地区と呼ばれるものは、今後烏丸通りを北上するでしょう

が、この環境だけは守りたいと思います。

森 未来像というようなことではないのですが、きょう皆さんのお話を聞いていて、おもしろいなと思つたのは、例えば十四世紀、十五世紀、十六世紀の時代のものならば、祇園祭の山鉦を見に行くと、今でも使われておりますね。現在京都市民が祭りに使っている時代のものが一方では地下に埋っている。ですから、われわれ校地学術調査委員会のほうの取組も、今までは純学術的な面が多かったけれども、先程林先生のおっしゃったようなお菓子の問題なんかも、同志社界限にあるいろんな店、それぞれの店に室町時代以来の何か伝統がないか、例えば今出川通りにお豆腐屋さんがありますね。ああいうところに、仲村さんが説明された今出川豆腐というようなものの何かが残っていないか、あるいはお酒屋さんのなかに何か残っていないかとか、そういう新しい視点も加えていかないといけないんじゃないか。後世に残していきたいものは、なにも緑の森、遺跡というような単位だけじゃなくて、ふだん見落としているようなものも、これから重点的に少し掘り起こしてみるという——土を掘るという意味じゃありません

んけれども、その必要があるんじゃないかという気がします。

原 やはり歴史的にも長いし、外のほうはあまり変化がない。ないということは、裏返してみれば、昔のものが残っているということなんで、歴史的にひじょうに恵まれているところであって、私ともだいじにしていきたいなという気持ちは強いですね。

林 私は、いま森先生がおっしゃいましたように生活史といえますか、そういうものをもう少し調べていったら、いろんなおもしろいものがあるんじゃないかと思えます。実は一昨年、鞍馬とか市原とか、あの辺の食生活を調査したことがございました。あの辺は正月は白みそのおぞうにかと思ったら、そうじゃなくて、納豆を餅に入れて食べるんです、ああいうところにそれが残っているの、京都のまちなかにもそういういろんな古いものがまだ残っているんじゃないかという気がして、とくに環境をいろいろ調べたいと思っています。

鈴木 きょういろんなことを教えていただいた訳ですけども、同志社の界限は、例えば幕府だとか、公家だとか武家の屋敷だと

か、それに各時代の変遷がいろいろある訳ですけども、発掘調査をしたかぎりでは、例えばそこから使われている土釜だとか、すり鉢だとか、庶民が使っているものと全く変わらないものが主体をなしている訳です。ですから、やはり上京における庶民の暮らしの変遷というものも含めて、私もこれから調査していかなきゃならないんじゃないかということ強く感じるんです。

それと同時に、とくに自然科学の先生方のお話を伺っていて感じましたのは、これから校地学術調査委員会が仕事を続ける訳ですけども、その際に、文献の方々のお力や、自然科学の方々のお力をもっと大いにちょうだいしまして、さらに調査を進めていくことにしたいというふうに感じました。

市民と大学

安岡 今までの出土品はどうなっていますか。

森 やはり一つは、地下から出ました遺物、それは室町時代の庶民生活を考えるうえにひじょうに重要ですね。平安時代の『源氏物語』や室町時代の『徒然草』なんかを研究

する場合に、その当時の生活の実態をよく理解しないで、狭い意味での文学的にだけアプローチしていても、もう時代おくれではないか。

ですから、同志社の界限は、室町時代を研究するには重要な場所ですから、出てきたさまざまな庶民生活の資料なんかをたえず陳列する場所を設けるべきじゃないか。これはなにも出土遺物だけではなくて、高野川と賀茂川のそれぞれのれきとか、伝統的な産業の資料とか、あるいは古い地図とかを総合的に学生に見せるところが要るのではないかと。現在新町に考古学の資料室はありますけれども、どちらかというと、収蔵庫でありまして、一般に公開することをそれほど重点に置いておりません。あれでは三十人も入れれば、もう一杯になる状態ですから、これは早急に充実させる必要がある。教育の場にもすぐにも役に立つし、研究の場としても、また、一般市民と大学との接点としても役立つことなので、みんなで知恵を出し合いたいと思うんです。

横山 それは賛成で、またひじょうに大切なことだと思います。掘り出すのはだれでもできる——だれでもと言うと失礼ですが、一

応できますけれども、掘ったものが今後どう使われていくかということは、ものすごくたいへんなことです。何でもそうですけれども、サンプリングしてきた人間はサンプルを大切にすけれども、もたらした人間は、これはなんだということ。おやじが一生懸命集めた歴史資料の古いものでも、息子の代になると捨てるみたいなもので、そういうことがありますから、校地学術調査委員会でやったものを大学が今後十年、二十年の単位でどうするかということは、ひじょうに大切なことだと思えますね。やはり、そういうものをならんかの形で続いて公開できるようにできれば最高にいいことだと思いますね。ただ、出土品とか、化石なんかを掘っても、現地を離してしまふといけないうですね。例えば東京の博物館に持っていくて置いても、全然意味がない。世界的にもそういう例は沢山ありますけれども、なるべく現地にあって、なおかつそれが永続的に大切にできるような体制を組む必要があるでしょう。

安岡 同志社の校地をめぐる問題から、文化財の保存の問題、それからまた庶民の歴史を発掘しなければならないという話がござい

まして、私も全く同感しております。実は表面にあらわれてこない庶民の歴史というものがありまして、私も人文科学研究所の一つの研究班のなかで、京都の商業慣行調査をやっております。例えば、うちの近所の菓子屋さんですけれども、五年勤めたら別家させますから、雇いたいという張札がしてあります。こういったことも京都の商業習慣として、庶

民の歴史のなかの慣習として残っております、われわれがやる場合は、文献から調べていたり、現在残っているおもな慣習を調べていく訳ですけれども、これまでの大学の歴史学というのは、比較的庶民の歴史を無視しておりました。この古い京都市の歴史というものも、最近までまとまったものがなかった訳ですね。そういう点、同志社には人文科学研究所がありまして、西陣の歴史を組織的に調べたり、ほかの研究も歴史的にやっている方がおられます。そういう問題も合わせて、市民のなかにある文化というものを今後考えていかなければならぬと思ういます。

司会がまずく、お話を十分承れなかったんじゃないかと思いますが、ひとつご勘弁を願いたいと思います。

(一九七五年四月九日)

同志社時報 第54号

創立100周年を迎えるにあたっての宣言

立学の精神が更に全学に起こり来たらんことを……………小松 幸雄

天にあるふるさとを望んで……………竹中 正夫

時 評 犯罪被害者問題の一つの視点……………大谷 実

同志社の学術・文化刊行物『経済学論叢』……………榊原 胖夫

えと文・随想・その他

1部 150円・年3回発行